

このように口蓋裂、口蓋穿孔を補綴的に閉塞する技術は、齒科医学の進歩とともに開発されるところが多かった。しかし十九世紀中期になると、外科手術により口蓋裂、口蓋穿孔を閉鎖することが成功すると、人工口蓋の意義は著しく後退することになる。現在では顎・口腔外科手術によって切除した部分を補綴する顔面・顎補綴の領域が開拓されてきている。

(日本齒科大学新潟齒学部)

一〇〇年目の女医の卵たち

大村 敏郎

一八八五年はわが国の公許女医の第一号である荻野吟子(二八五―一八九七)が登場した年である。女医公許の制度そのものは前年の一八八四年に制定されているので、その百年記念として日本女医会が東京新宿で記念式典を開いたのは一九八四年十一月のことであった。

その席上、順天堂大学の酒井シヅ先生が荻野吟子に関する記念講演をされ、そのあと女医界の活動に貢献した者に対する賞として新しく荻野吟子賞が設けられ、第一回の受賞者として演者の伯母大村ひさ多(一九〇一―)が選ばれた。

荻野吟子が女医をめざしたのは自分が性病になった時に屈辱に耐えながら治療を受けなければならなかったが、そのような想いをしないで済むように、女性が医療を行うことによって不幸な女性達を救おうと考えたからだと言えら

れている。

荻野吟子が女医になって百年目の年から、女性だけの医学教育の場としてユニークな存在である東京女子医大で演者は医学概論の一部を担当するようになった。講義は一年生の一学期と二学期にあり、演者の担当する医学史に関するパートは九月から始まった。

そこで早々にレポートの提出を求め「医学の道を進もうと考えた理由と将来への展望」という題を与えた。これは専門的な教育を受ける前に、個人個人の医学の歴史の原点を記録させておき、大成した偉人のレトロスペクティブな個人史とは異なった未来への展開を期待してのものである。アンケートとちがって各自の発想による論文であるから、データを集計し傾向を分析するには不便だが、自由な文章からは信条が生々と伝えられており、女医誕生から百年目の女医の卵たちの考え方を記録にとどめておくのも意義のあることだと考えた次第である。

レポートは原稿用紙五枚程度という条件をつけた。何故医の道を選んだかというテーマに入る前に、まず医というものに対する接点から書きおこしている者が多かった。五

枚の分量をうめる必要上から書き加えたものかもしれない。

ある者は自分の父や母が医者であるという家庭内でふれる医との接点、ある者は自分が病弱であったという患者としての接点、また家族や友人の病氣や死がきっかけとなり医療を身近に観察したという接点などがある。そして医者への努力や誠意といったすばらしいものに引かれてというのもある反面、不幸な転帰をとった不治の病を何とかしたいという挑戦や、医療不信から発する反動などの動機からその後の発展がみられるものもある。

次に医との接点を認識した時期であるが、殆どが小学生から中学の一、二年までに起きている。この時期は医学教育以前の問題であり、医学教育機関では手の届かない所で動機づけが行われていることになる。日常の医者への発言や行為が次の世代に及ぼす影響は甚だ大きいといえる。

レポートを提出した九八人中、自分の家が医者であることを明らかにした者六八人、逆に一人も医者がいないことを強調している者九人と家庭環境における医を説明しているのは合計七七人。この問題に触れていない者が一九人で

あった。なお母親が女医である者が一三人である。

医の道を選んだ動機であるが、人間愛にめざめ医学によって人を助けたいからとか、医学はやり甲斐のある生涯勉強すべき学問だからというように、女性であることを特に意識しない回答の他に、女性として最高の職業だからとか、手に職をつけておき結婚の有無にかかわらず生活を安定させたいからといった女性の進路としての特異性がみられる。また医者之家に育ち、周囲の雰囲気につられて何となく入ってしまったとか、学校の成績が優秀だったので教師にすすめられたといった強い決意や意志とは無関係な者も多少いた。

これらを通して見て言えることは、荻野吟子のように不幸な「女性患者」を救おうという動機や、女性の地位の向上の先兵としての女医の創設期の意義を論じている者は見られなくなっていることである。これは百年間の社会の移り変わりがあり、女性の地位や環境の向上などがそうさせたのであろう。

最後に将来像については、まだ一年生で基礎医学の教育にも足を踏み入れていない段階であるが、丁度レポートの

直前に三日間看護実習ということで病棟を見てきている。

これは他の大学では見られない独特の教育と思うが、看護婦の業務を通して病院を眺め患者を大切にすることを覚えてくる。この病棟での体験が大きな影響を与えたのかもしれないが、何科へ進むにしても患者の苦痛や悩みを解る医者になりたいと答えた者が多かった。何を研究したいとか何科へ進みたいという希望とは別にこのような回答は好ましいものと思われ、その気持が長く続くことを祈りたい。

(慶応義塾大学医史学研究室)